



毎月十五日発行 社会 宗像 定価 一年送料共 1000円

神具・装束 株式会社 井筒 福岡店 電話 福岡(三三六)五二一三

献茶祭齋行

第十四代 表千家家元 而妙齋千宗左宗匠奉納



筑紫路に漸く秋も深まりつつある十月十七日、第十四代表千家家元千宗左(而妙齋)宗匠御前による、而妙齋千宗左宗匠奉納の献茶の儀

は、西日本地方では異例の事で、茶の道を志す人々にとつては待望の行事である。

しよと集まり、出光興産株式会社福岡支店の奉仕により用意された約四百席の

参進、合流の上敷舎にて修職、本殿へと進む。

間て及ぶ祭典は滞りなく終了した。午後より儀式殿に設けられた出光席、齋館に設けられた同門会館の副席にて、掛

古式祭とは、今年最後の収穫感謝祭のことです。氏神様へ一年間の神恩を感謝して今年の収穫物を捧げ、忌火で炊いた御飯をお供えし、氏子の人達が一緒にいただく神事です。

この古式祭は又「延命招福」の集いともいわれまいたが、氏神様と共に一年間の喜びを分かちあうという「神人共楽」を共にする、年に一度の集いであることに意味があります。

八百年以上の伝統をもつ宗像大社の古式祭には、特別に奉納と呼ばれる、九年母、饗餅等で作られた特殊神饗や、江口の浜よりあるケバサモという海藻をお供えして、お座を備えるが古来からのしきたりです。又くじが行われ、翁面・御神盃などが授与されます。

一、日時 十一月十五日(火曜日) 一、場所 祭典 本殿 二、お座料(二名分) 白米一升又は金五百円

神国の民の風儀 神宮大麻頒布百二十周年

今年、明治五年四月一日、明治天皇の御聖慮により、神宮大麻が皇祖天照大神の御神徳を仰ぐみしるしとして広く国民各戸に頒布されるようになってから、百二十周年にあたる。

神宮大麻は、かつては「お祓いさん」あるいは「お祓大麻」とも呼ばれてきた。「私幣禁断」の制を有する神宮に對して、大御神様に感謝の誠を捧げたいという国民奉養の熱意は強く、その願いを受け入れ神宮と国民との絆を深めてきたのが、御師、或は「大夫」と呼ばれた伊勢の師範であった。

「諸神武創業の始に原つき」との王制復古の理想を理念とした明治維新では、新政府は大嘗代の古制に範をとって神祇官を復興して神祇制度の改革を進めた。神宮においても明治四年に大改革がなされ、その一環として従来師

職が行ってきたお祓い大麻の頒布が停止され、改めて明治五年に明治天皇の恩召により、「お祓大麻」を「神宮大麻」と改称、神宮司庁から大司宮の責任において直接頒布されることになった。

当初は神宮司庁から各府県庁に委託し、各郡村区長、戸長等の手によって各戸に頒布されたが、明治十三年三月、公的機関による大麻頒布は好ましくな

変化してきたことが理解される。歴史の変化は時として貴重な伝統や儀礼をもその流れの中に吞みこんで消滅せしめることがあるが、神宮大麻の頒布の伝統が今日まで維持されてきた主因の一つは、神宮と皇祖天照大神に對する神代以来の国民信仰とこれを支えてきた人々の信念であり努力であらう。

朝々天照大神神様の御神徳を拝し、反面、過疎化に悩む地方農村などにお

いも、頒布体数の向上に努めている人々のあることを神宮当局者は忘れず、いともなう神宮に力を入れているのである。

一昨年から昨年にかけて旧東側諸国やソビエトに政変が生じ、本来ならば戦争や革命の動乱をもつてしかり起こらないような変化が生じた。世界の国はそれぞれその悩みや混乱を抱えて、二十世紀の終りを迎えている。さらに神宮に對するわが国は、戦後、選挙民に對し誠実と清廉さが要求され、一度不祥事がある

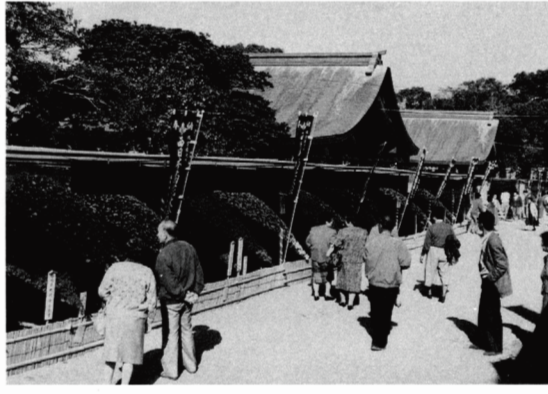
宗像大社歌会詠草

第三七七回 中村 吾郎 選 武丸 中村さつき 朝あさにて花葉しめと朝顔を窓の日除けに子は袖えゆきぬ

# 第二十二回

## 西日本菊花大会

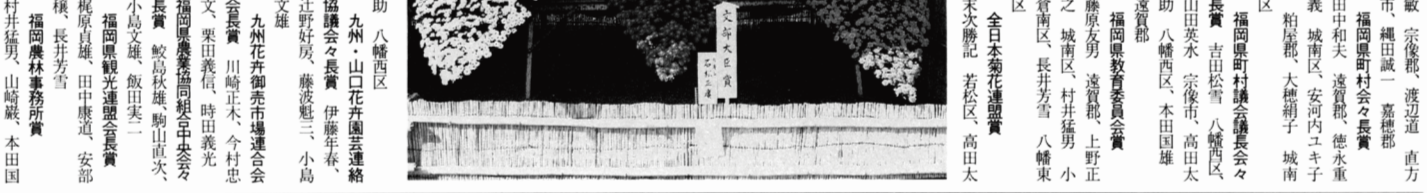
内閣総理大臣賞に  
益裁部門 阿部正士氏(遠賀郡)



宗像の秋を飾る当大社の一大神賑行事、西日本菊花大会主催、宗像大社菊花会、後援・福岡県他も、本年で二回を迎え、各方面の温かい御支援と御協力により十月二十日から十一月二十一日迄の期間、当大社境内の特設会場で大々的に開催された。

山口各県に及び、出品作数も増加の一途をたどり、その数は現在展示会場限りの三〇〇鉢を遥かに越える数に達している。この為、各地各会にて予選審査を行い、優秀なるものを本大会に出品している。又、本大会は、出品数、参加者数とも、種類も豊富、品評の優秀さ、種々の豊富さ、会場設備の充実等、文字通り西日本随一の大会として、自他共に認められており、又、競作展としても全国に例を見ない權威をもつものとして、斯道関係者の中で関心を集めている。

- |  |   |  |   |
|--|---|--|---|
| 高山 包夫 宗像市<br>運轉大臣賞<br>特作部門(古木添木作) 櫻井 為生 田川市<br>内閣府局長賞<br>特作部門(競作菊花壇) 平田 泰輔 博多区<br>科学技術庁長官賞<br>小品賞部門<br>早川 香雪 八幡西区<br>環境庁長官賞<br>環遊部門<br>千々和 正信 八幡西区<br>建設大臣賞<br>特作部門(千輪咲) 大徳 正義 城南区<br>宗像大社司賞<br>猿渡啓光 大牟田市、船越<br>順一 大野城市、石田御前 | 敏 宗俊部、渡辺道 直方<br>市、細田誠一 嘉穂郡<br>福岡県町村長賞<br>櫻井 為生 田川市<br>義 城南区、安河内ユキ子<br>粕原龍二 大穂郡、城南<br>福岡県町村長賞<br>長 吉田松雪、八幡西区<br>山田英水 宗像市、高田太<br>助、八幡西区、本田国雄<br>遠賀郡<br>大徳 正義 城南区<br>福岡県教育委員会賞<br>藤原勇 遠賀郡、上野正<br>之、城南区、村井猛男、小<br>倉南区、長井芳雪 八幡東<br>区<br>全日本菊花連盟賞<br>末次勝記 若松区、高田太 | 雄、藤波魁三<br>福岡商工会議所賞<br>石丸五郎<br>九州旅客鉄道賞<br>福岡県花弁園芸連合会賞<br>長 呉屋大吾、山本義雄<br>吉田町、中原貞次<br>粕原龍二 長官賞<br>木村正明、森口国利<br>遠賀郡町長賞<br>石田桂子、古波成忠<br>遠賀郡町長賞<br>宗像郡町長賞<br>吉田吉吉、田中敏子、田中<br>祐哉、西山時秋、矢野茂、<br>谷崎勇、飯田実一、宮小路<br>喜彦<br>宗像郡町村長賞<br>水田ツルミ、秋本光司、矢<br>野茂、山口義賢<br>遠賀郡町長賞<br>浜田豊、広渡一富<br>若原町長賞<br>網脇孝、寺田智一<br>水巻町長賞<br>成田、波多野松男<br>古賀町長賞<br>岩倉秀夫、阿久根力<br>宗像市賞<br>桑原忠夫、池上福元<br>津屋町長賞<br>穴井利之、谷口小太郎<br>福岡町長賞<br>寺、政司、馬場園馨<br>寺、政司、馬場園馨<br>田畑実志、最所孝子、広渡<br>一富、池口盛信、堤勇孝、<br>千々和信、許保保、中村<br>昭<br>大船村長賞<br>馬場園馨、安藤達男<br>玄海町長賞<br>三浦澄夫、森口国利、赤崎<br>高田健夫、下村連、山本繁、<br>高山健夫、竹内雪費、中尾<br>利夫 | 清家仙三<br>玄海町商工会賞<br>長崎弥太郎<br>大島村商工会賞<br>高小トエ<br>宗像大社氏子会賞<br>伊藤タツ子、花田みや子、<br>吉藤早月、田代定<br>玄達福岡ライオンズクラブ<br>ブ賞 波多野松男、安永儀<br>三郎、成富隆、井上裕弘<br>神楽旅館組合賞<br>久保田勝一、手島喜久美<br>大庭節子、山口義賢<br>宗像青年会賞<br>河野林、永島文男、清家仙<br>三、原田雪嶺<br>宗像地区商工会青年部賞<br>石田脩、楠理、安永儀二郎<br>堤勇孝、梅原一平賞<br>中康方一賞<br>石田御前、西山時秋、田畑<br>実志、長崎弥太郎<br>網脇孝子、高山包夫<br>尚 前大会より設けて<br>いる出品者の中より選ば<br>れるの藤波魁三氏(明治三<br>十五年生、九十歳が受賞<br>藤波氏は高齢にも拘らず懸<br>念作、千輪咲を出品、上位<br>入賞され、表彰式当日高田<br>会長より表彰状並記念品が<br>贈呈された。 |
|--|---|--|---|



本年の気象は、五年続きの暖冬、多雨、低日照で菊の冬全芽に対する低温遭遇量不足、育苗中に柳芽が発生するなど観賞キク栽培には大変な時期であった。その後、梅雨時期は平年より降水量が少なく、日照時間は平年に比べかなり多し、八月に台風が十号が来襲、雨の日が多く気温もかなり低く、九月十月は好天に恵まれ、気温も平年より順調であった。菊の生育は順調であった。

第二十二回西日本菊花大会審査講評 福岡県農業総合試験場 園芸研究所長 室園 正敏氏

①大輪鉢(鉢花壇)部  
暖冬と一二月の天候不順及び四一五月の高温の影響で菊の冬全芽の育成不良、柳芽の発生で育苗に失敗された会員が多かったこととおもわれる。九月十月の好天の影響で全体の良く仕上がっており、優品の出品が目立った。

②鉢花壇部  
出展者(福岡新出光、白柱、福岡中九州支店、福岡営業所、箱崎営業所、西久大連(福岡)、久留米連(福岡)、西鉄連(福岡)、宗像(福岡)、柳芽の発生で育苗に失敗された会員が多かったこととおもわれる。九月十月の好天の影響で全体の良く仕上がっており、優品の出品が目立った。

③大輪鉢(鉢花壇)部  
鉢花壇部は、柳芽の発生が多かったことと肥培管理が適正に行われなかった為花腐れ病(ボトリナス)の発生が目についた。開花期は例年と比較して早く、出品物を揃えてみることが出来た。

④古鉢部  
小鉢賞としての出来は、これまでにならぬ程度に仕上がっており、鉢と鉢との間に隙がみられた。

⑤古鉢部  
小鉢賞としての出来は、これまでにならぬ程度に仕上がっており、鉢と鉢との間に隙がみられた。

⑥古鉢部  
小鉢賞としての出来は、これまでにならぬ程度に仕上がっており、鉢と鉢との間に隙がみられた。

⑦その他  
一文字菊、競作、古木添木、千輪咲、自由花壇等、多種の出品で菊花展全体が大いに盛り上った。本年は、暖冬と春先の高温の影響で柳芽が多発した。上位入賞者は全体的に良く仕上がっており、努力のあとがかがみられた。出品規格からみて五鉢が異なる仕立てであることは



静園型は昨年と同様に出品も多く、努力のあとがかがみられたが、一部のものに主枝と側枝の取り方にアバランスがみられた。

⑧古鉢部  
小鉢賞としての出来は、これまでにならぬ程度に仕上がっており、鉢と鉢との間に隙がみられた。

⑨古鉢部  
小鉢賞としての出来は、これまでにならぬ程度に仕上がっており、鉢と鉢との間に隙がみられた。

⑩古鉢部  
小鉢賞としての出来は、これまでにならぬ程度に仕上がっており、鉢と鉢との間に隙がみられた。

# 天皇・皇后両陛下 行幸啓・還幸啓奉告祭

## 中華人民共和国御訪問の御安泰を祈り



天皇皇后両陛下の中華人民共和国御訪問に際し、当大社では十月二十一日に御渡航安泰祈願祭、二十八日には御渡航安泰奉告祭を厳格に執行した。

先ず、十月二十一日午前十一時、養父宮司以下神職は廣服に威儀を正し、齋館前庭に列立、出光氏子会長を始め、地元総代参列のもと、厳格に修祓、本殿へと参進、御渡航安泰祈願祭が執行された。

宮司一拝後、奏楽の流れの中、宮司が祇儀に座し、祝詞奏上げが行われ、御渡航の安泰を祈念申し上げた。その後、巫女により浦安舞が奏され、宮司主串、続いて氏子役員、地元総代の代表者より敬虔なる主串の白い灰に覆われていた。

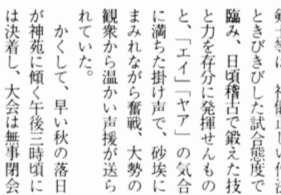
## 雲仙普賢岳視察記

### 宗像地区防災協会主催

秋深まる十月二十日、二十一日の二泊三日の日程で、平成四年度宗像地区防災協会主催の視察研修会が行われ、当社も協会の一員として参加、雲仙普賢岳及び島原消防本部災害記録等の視察研修を行った。

秋深まる十月二十日、二十一日の二泊三日の日程で、平成四年度宗像地区防災協会主催の視察研修会が行われ、当社も協会の一員として参加、雲仙普賢岳及び島原消防本部災害記録等の視察研修を行った。

雲仙九州ホテルに泊した一行は、翌朝、仁田野展望台に登った。この展望台から望む普賢岳は、白煙を漂わせた。火口は見え、火口から吹き出す火山灰は風が無く、あたり一面は



が捧げられた。又、六日後の御帰国の日である二十八日には、前祭典同様、午前十一時より御渡航安泰奉告祭を厳格に執行した。天皇皇后両陛下が無事御帰国され、御安泰を祈り、御協力を得、幸いにも大事には至らなかった。

天皇皇后両陛下が中国を御訪問されるにあたっては、各方面より過激派グループによるゲリラ活動があるとの通達を受けて、当社に於

ても、ゲリラを警戒し、厳戒態勢で臨み、宗像警察署を始め、地元消防団などの御協力を得、幸いにも大事には至らなかった。

## 第二十一回 奉納剣道大会

錦秋の十一月三日、恒例の第二十一回奉納剣道大会が、本殿前の境内に於て開催された。

大会の当日、早朝より郡内各地から、防具を背に、小学生を中心に、中学生、高校生、大学生、生で約五百五十名近くの参加者が集

した。各部の結果は次の通りである。

男子の部  
優勝 久保田毅 日の里東  
二位 川崎 衛 津屋崎  
三位 藤原 太 池野  
三位 藤原 太 池野

女子の部  
優勝 岩尾有紀子 安海  
二位 緒方幸子 南郷  
三位 七田加奈 神

奉納吟詩舞道大会  
明活節の佳日にあたる十一月三日、清原社山山会主催により、第十八回宗像大社秋季奉納吟詩舞道大会が、会員八十九名参加の下、午前七時半より清原殿に於て開催された。

山会役員にて、吟詩を披露、秋晴れの神苑に響き渡った。

## 第十八回 奉納柔道大会

十一月八日(日)菊花薫る境内に恒例の宗像大社奉納柔道大会が開催され、試合場は白雲道着姿の選手達で熱気に包まれた。

この夏バレルオナオリビックで日本中を沸かした、田村亮選手と女子選手も出場しており、男子選手を相手に奮戦、盛んな声援を受けていた。

一年生の部  
優勝 平野敬一 城山  
準優勝 前 謙太 福岡東  
二位 武尾 隆 福岡東  
三位 池田隆雄 福岡東

社務日誌抄  
十月一日(日) 宗像大社秋季大祭  
十月二日(日) 織神社祭  
十月三日(日) 出光興産(株)路支店長

公庫水作主事外三名参拝  
大空府天満宮との懇親  
野村会  
日の里小学校遠足一〇名参社

宗像大社歌会  
俳句作品集 三五〇

ひかりヶ丘 南 風生  
句碑の字の説めず秋の蚊叩きけり

藤沢 井上 支洋  
終の花こぼして揺れる木槿  
かな

福岡 森 清  
稲鬼れて軒の雀の笑ふ  
時雨

田熊 安部 ゆき  
寝つかれず小さき不安や虫  
時雨

福岡中央 力丸 玄風  
秋に映ゆ男の児の家紋宮詣り

自由ヶ丘 細川 絹子  
かばひひ渡る吊橋秋の風

名古屋 小田 喜一  
まきほどに暮れてならじと  
法師舞

日ノ里 花田いつ枝  
綿菓子を買ふに始まる放生  
会

田熊 力丸 一郎  
石焼の芋うる声にはほれほ  
と

津屋崎 井浦 良介  
星を調べに子ら集い来る高  
台に

若松 井手 清隆  
磨き上げし古太刀の匂ひ秋  
深む

福岡 二宮 末子  
裾野吹く秋も深し肌寒む  
し



(続) 浜の寄物  
遠賀・岡垣浜 (一)

72

昭和三年、遠賀郡芦屋浜に古銭が漂着し、それが大きな話題となり、更にその後古陶磁器が打ち揚げられた。収集された膨大な古銭は、芦屋町立歴史民俗資料館に運ばれ、いま古銭を研究する者によって、その一部が採集されている。その一部は平成元年に、宗像市・ユリックスで行われた海の漂着物展で初めて展示された。大きな反響を呼んだ。岡垣町吉木の添田征氏氏は毎日、自宅から約五キロの岡垣海岸を、犬の散歩をかねて歩かれ漂着物の採集を流す風習があったことは、漂着物が如何に多く、それを期待していたことと無関係ではあるまい。



漂着した完形品の一部

採集された陶磁器は、古陶器、中国、朝鮮の青磁、白磁、それと中心をなすのは江戸時代、肥前波左見で焼かれたクラマラカ焼である。各時代まらまら焼が破片だけで一万点以上にもなっている。その中に波左見を中心とした「長門間」と呼ばれるものもある。波と砂にもまれ、洗われ、色の剥けたものもあるし、時を感ぜさせない新品同様の漂着する器形は頻りに見られる。

「魏志倭人伝」に記されている航路である。米の上陸地の辺り唐津平野には、弥生時代前期の葉畑遺跡(縄文晩期とも言う)がある。この遺跡からは多くの農耕具とともに、水田の畦やコメが発見されている。約七千年前の中国揚子江(長江)下流で始まった水稲耕作は、朝鮮半島を経て、約四〇〇年前、縄文時代後期(約一〇〇〇年前)に上陸し、短期間の内に東北地方まで広まった。北部九州の土人の先住民の骨は、先住の縄文文化と異なっている。弥生人は「コメ」と一緒に渡来した朝鮮半島の人々との、混血の結果だと考えられている。



漂着した陶磁片の一部(添田宅にて)

稲作農耕文化の社会が日本を育いてきた。日本は農業王国であり、日本人の主食は米である。米作りは水田耕作と畑作農耕とがあり、弥生時代の農耕社会は水稲耕作から起ってきている。イネの生まれ故郷はインドであるが、さてどの様な道を通って入ってきたであろう。一般に言われている

ルートは、インド高原を離れた後、東南アジアの各地を経て中国大陸から朝鮮半島、対馬、志岐(唐津)上陸、糸島半島を通り福岡平野へと入り、これが九州一帯を広げた。これが定説である。稲作文化の通路であり、北部九州がその中心であると言われている。丁度三世紀に書かれた

三年前の夏、海底の岩場に挟まった陶磁器とその破片を発見。先月末まで四回掘り、ほぼ同じ場所から百個をこす。絵皿、湯呑み、茶わんなどを次から次へと引き揚げた。同文化調査が調査したところ、一八世紀後半から一九世紀前半の庶民が食器として使っていた古伊万里と判明した。この事、添田さんが歩かれた岡垣浜の多数の漂着陶磁と無関係ではない、添田さんは海岸の時は、網を持っていかれる。陶磁器がまだ波間に漂っているのだから、それを網ですくあげるのである。時には魚や貝類もあり、一石二鳥の役割を果たすことになる。

三年前の夏、海底の岩場に挟まった陶磁器とその破片を発見。先月末まで四回掘り、ほぼ同じ場所から百個をこす。絵皿、湯呑み、茶わんなどを次から次へと引き揚げた。同文化調査が調査したところ、一八世紀後半から一九世紀前半の庶民が食器として使っていた古伊万里と判明した。この事、添田さんが歩かれた岡垣浜の多数の漂着陶磁と無関係ではない、添田さんは海岸の時は、網を持っていかれる。陶磁器がまだ波間に漂っているのだから、それを網ですくあげるのである。時には魚や貝類もあり、一石二鳥の役割を果たすことになる。

神郡宗像 (十) 田中政喜  
共に、花々しい戦をして、多大の名をあげた。その後、盛後のため押領された宗像は、無事に返還された。宗像は、平氏余党の探偵に安堵した。その後、宗像は、赤間村の田久に住んだ。田久は、兵火で焼失した。その後、父氏季の遺言を聞き守って降参することなく、却って城郭を堅く構え、抗争した。結局、七月、千四日戦の火事をおこし、氏平の兵は、氏信の居城片島の城に攻めかけ、無二無二に突入して攻め落した。よって氏信は都に上った。島羽宗像へ上訴して社務の院を受けた。この事、氏平も怒意にはかなわず降参して、久安二年(一四〇一年)官職を辞退した。前回の大宮司家の系を継いだ。



宗像平信